



営農情報

第36号 平成27年5月29日

「あまおう」6月の管理

南筑後普及指導センター

福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t以上を目指しましょう

平成26年度産の生産が終わりました。実績は以下のとおりです。

<JA 全農ふくれん実績 10月上旬から5月中旬>

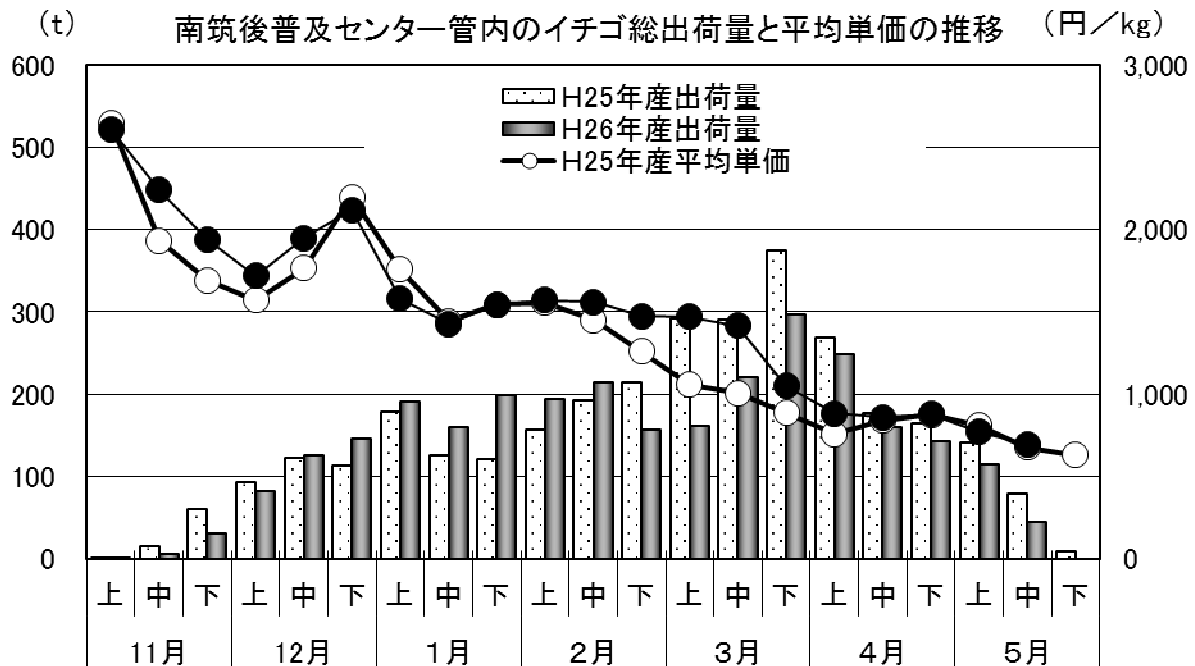
()内は前年対比

	生産者数	栽培面積	10a 当たり数量	10a 当たり金額	平均単価
JA福岡大城	282 名 (99%)	65.7 ha (98%)	3,801kg (91%)	5,184 千円 (103%)	1,364 円/kg (114%)
県合計	1,625 名 (99%)	336.0ha (99%)	3,169kg (91%)	4,289 千円 (103%)	1,353 円/kg (113%)

平成26年度産は、10a 当たり数量は前年を下回りましたが、平均単価が高かったため、10a 当たり金額は前年を上回る結果となりました。

平成26年度産の主な特徴としては、①8月の極端な日照不足により、苗の充実が不十分であったこと、②1番果房から3番果房までの果房間葉数が少なく、連続した収穫で出荷の大きな山谷が見られなかったこと、③連続した着果負担と天候不順により、特に3月の出荷量が伸び悩み、春先の出荷ピークの山が低かったことが挙げられます。

高収量を確保するためには、まず充実した苗の確保が重要となります。平成27年度産に向け、作型に応じた計画的な苗作りを心がけましょう。



今後の管理

＜育苗目標＞

- **クラウン径8mm以上の良苗作り**（収量確保）
- **病害虫のない苗作り**（炭そ病、ハダニを本ぽに持ち込まない）
- **作型に合わせた苗作り**（まず、作型を決めましょう）

順調にランナーが発生していますが、一部、肥料やかん水が不足したほ場において、子苗数の確保が遅れています。

子苗数の確保が遅れると梅雨に入ってから採苗することとなり、「炭そ病」に感染する危険性が非常に高くなります。降雨前・後の予防防除を基本に、罹病株の早期発見・除去など、「炭そ病」対策を徹底して下さい。また、「うどんこ病」や「アブラムシ」、「ハダニ類」の発生も見られますので適期防除に努めましょう。

鉢上げ

【 さしポット 】 《 目標鉢上げ時期 》

8月処理開始の株冷	⇒	6月10日まで
8月処理開始の夜冷 9月処理開始の株冷	⇒	6月15日まで
9月処理開始の夜冷 普通ポット	⇒	6月20日まで

- 子苗採取前に、必ず、「炭そ病」の予防散布を行う。
- 本葉2～3枚で、3～5cm 発根した苗（それ以上伸びていれば切る）を用いる。
- ワラ被覆床では、採苗の1週間前からワラにかん水して子苗の発根を促進する。
- 活着を良くするため、鉢上げ前日に培土を十分湿らせておく。
- 極端な浅植えや深植えはしない。
- 鉢上げ後7日程度は、黒寒冷紗（610番）等で遮光して乾燥を防止する。
- 活着するまでは、葉水程度のかん水を1日に数回行う。
- 「炭そ病」対策として、採苗は雨の日を避け、気温の低い早朝に行う。
- 採苗後は苗が乾燥しないよう日陰に保管し、できる限り早く鉢上げする。
- 採苗当日に鉢上げできない場合は、苗が乾燥しないように湿らせた新聞紙に包み、2～3℃の予冷庫内で保存する。（保存期間は3日間まで）

※ 苗の発根促進・活着促進のために
タチガレン液剤 1, 000倍（挿し芽採取時 30分間挿し芽浸

（裏面につづく）

【 すけポット 】

- 降雨などで硬くなった培土は、根づき(根の入り)が悪いので、鉢土をほぐす。
- 鉢受け期間中は、「炭そ病」の定期的な防除を行う(特に鉢受け作業後)。
- 鉢土が乾燥すると根の伸張が悪くなるので、乾燥している場合はかん水を行う。
- 徒長防止のため、子苗への施肥は行わない。
- 必要数の子苗を受け終わったら、ランナーの先端を切除し、子苗の徒長防止と病害虫発生防止のため、親株の全葉摘除と直後の防除を行う。
- 子苗の切り離しは、最終鉢受け後10～15日目頃(根づいた頃)を目安に行う。ただし、降雨の日は絶対に行わない。

鉢上げ後の育苗管理

【 肥培管理 】

充実した苗作りに向けて、過不足のない肥培管理を行うが、「炭そ病」の危険性がある場合は、窒素過多にならない管理を徹底する。

- 活着したら、追肥(置き肥)を開始する(例:IB化成で1～2粒/ポット)
- 活着後、2回程度液肥を施用する(例:OKF1で1,500～2,000倍)。
- 軟弱徒長させないため、梅雨時期は肥料を効かせすぎない。
- 肥料切れする期間がないように、液肥で肥効を調節する。

【 かん水 】

- 過湿にならないよう、鉢土の乾燥状態(根の状態)を常に観察してかん水を行う。
- 活着後は朝主体のかん水とし、徒長防止と「炭そ病」予防のため、長時間濡れ状態にしない。特に、夕方のかん水が必要な場合は葉水程度とする。
- 小さいポットや棚式育苗は乾きやすいので、こまめにかん水する。

【 葉かぎ 】

- 葉かぎは、活着後根が十分に回ってから開始する。
- 葉数3.5枚を確保するように、古葉の葉かぎを行う。
- 葉かぎは、1回につき2枚までにする。
- 雨の日は絶対にしない。
- 葉かぎ後は、必ず、当日もしくは翌日に「炭そ病」の防除を行う。

【 病害虫防除 】

<炭そ病>

炭そ病菌は、雨やかん水で保菌株から周辺株に飛散し、感染・発病する。

- 「炭そ病」は、濡れた状態が半日程度続くとイチゴに感染する。そのため、午前中を中心としたかん水を行い、夕方には乾いた状態にする。

- 定期的な防除、降雨前後の防除及び葉かぎ後の防除に心がける。
- 発病株と周辺の株は、ほ場の外へ持ち出し処分する。
- ポット間隔をできる限り広くとる(18cmの間隔は確保する)。
- 育苗床の排水対策を講じておく。
- 育苗中の雨よけは、病原菌の飛散防止に効果が高い(特に梅雨期)。

<うどんこ病>

うどんこ病防除には、病斑のある葉を入庫または定植しないことが重要である。

- うどんこ病の病状が進展する梅雨期を中心に、しっかりと薬剤防除を行う。
- うどんこ病に感染している苗は低温処理せずに作型を遅らせ、葉かぎで感染した葉が取り除かれてから、入庫または定植に使用する。

(入庫時や定植時に、病徴のある葉が除去できているようにする。)

- さしポットで鉢上げ後の寒冷紗は活着したら除去し、苗を太陽の光に充分当てる。

<疫病>

- 梅雨時期から発生し始めるので、定期的な防除に心がけてください。なお、主な対策については「炭そ病」の項目を参照してください。

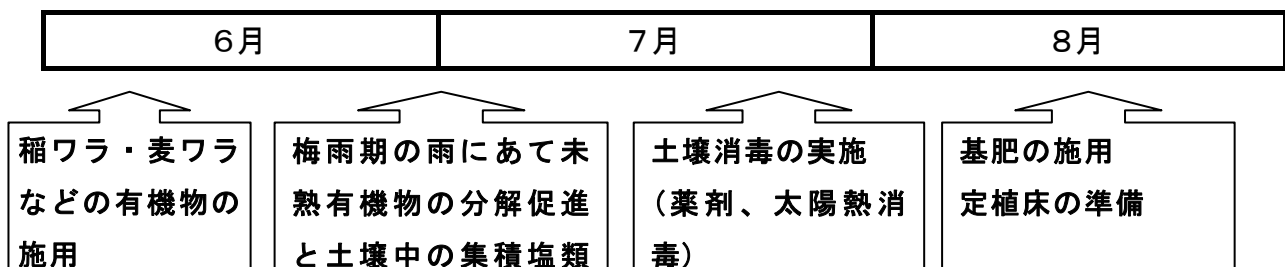
本田の土作り・土壌消毒

● 有機物の施用

- 前作の栽培で消耗された土壌有機物の補給が目的になる。(地力の回復)
- イチゴ栽培で消耗する土壌有機物は、堆肥約2t/10aに相当する。
- 稲ワラ・麦ワラ・家畜ふん堆肥等の有機物は、梅雨前に投入して土壌混和し、十分な雨にあてる。(分解促進、塩類溶脱のため)

● 土壌消毒

- 薬剤による消毒または太陽熱消毒のいずれかを実施する。



～「慣れ」と「油断」が事故を招きます～
 ”安全”な農作業と農薬使用を徹底しましょう！